

かまくらかいじょう  
鎌倉街道

鎌倉街道とは、政権が武士の手に帰し鎌倉幕府が開かれたため、諸国より鎌倉への交通路として利用された街道をいうのである。

この時代、武蔵武士は県内各地に居住していたので、そこから鎌倉への通路も開かれた。

こうして中世を通じて主要な街道が開かれたほか多くの連結路も発達していった。

江戸時代に入り道路の制度が整ってからは、必ずしも鎌倉へ往来する道路でなくとも、古くから開かれていた道路をすべて鎌倉街道の名で呼んだものようである。）

市内で鎌倉街道とよばれているのは二路線ある。

ひとつは現在の春日部八幡神社はちまん前の道で、春日部治部少輔かすかべじぶしょうすけが鎌倉への通路として利用したと伝えられる。

経路は八幡神社から春日部高校の塀際を通り、春日部税務署の左脇の道（今では面影だけになつてしまった）を新方袋から中曽根の「やじま橋」を経ていた。

また、鎌倉から奥州へ向う道としては、江戸の板橋宿から川口・安行・岩槻・慈恩寺・花積・道口蛭田・慈恩寺観音前・やじま橋・中曾根海善院かいぜんわき香取神社参道を突き抜け新方袋にいがたぶくろ（ここにて春日部館への道と分岐する）塚内つかない（火葬場付近）・坊荒・谷向（薬師堂前）・四方谷しほうだに（畑の中にある道）・戸崎（鷲香取神社前の道：④鷲香取神社に源頼朝が駒をとめて休んだという伝説が残されている）・御道・半縄はんなわ・百間村もんまむらの西光院前さいこういんへ出て高野こうやで利根川（古利根川）の渡し場を渡り奥州へ行く道がある。

前述の春日部への道は、その後、粕壁宿の発達により利用されて、岩槻古道（岩槻新道への対称）ともいわれた。

この道も奥州へ向かう通路として、春日部八幡神社から浜川戸薬師堂前はまかわどを通り梅田村雷電社前うめだ らいでんしゃから内牧への七曲り道をジグザグして戸崎台から鷲香取神社前に通じていた。

初出「広報かすかべ 昭和五十二年一月号」市史編さん室だより